

総生産額5.3%減233億円 青果は過去最高 J Aおとふけ

2019年6月6日

J Aおとふけ（笠井安弘組合長、正組合員1139人、総代248人）の第63回通常総代会が5日、同J Aで開かれた。2018年度の農業総生産額（交付金、共済金含む）は、好調だった青果販売や生乳生産により、過去3番目となる233億円を記録した。過去最高となった前年度246億円比では13億円、5.3%の減。

豆類、小麦、ビートなどの農産物の販売額は、6月中旬の低温と日照不足、7月の降雨などの影響で、前年度比1%減の83億円。

青果は堅調な販売単価で推移したことから17%増の43億円となり、過去最高となった。特に、主力のニンジンでは全道的に出荷量が安定しなかったことから市場価格が高騰し、高値で取引された。畜産では、良質飼料の確保や乳価の上昇で生乳が過去最高の45億4000万円（生産量4万5080トン）に。個体販売では市場価格の高値推移で、乳用牛が9億500万円（計画比86%増）、肉用牛が15億4200万円（同31%増）と好調だった。

経常利益は5億2268万円、当期剰余金は販売・購買事業が計画を上回ったことや経費削減により、計画（1億8600万円）を大幅に上回る4億3523万円を計上した。

任期満了に伴う役員改選も行われ、笠井組合長ら理事15人（再任11人、新任4人）、監事5人（再任2人、新任3人）を選出した。

総代会には書面や委任を含めて219人が出席。笠井組合長は「農業所得の増大や担い手確保に向け、地域に密着しさらなる事業の推進を図っていきたい」とあいさつした。

新組合長に佐野専務 昨年度取扱高5%減126億円 J A本別町

2019年6月7日

J A本別町（正組合員497人）は6日、農協会館で第41回通常総会を開いた。2018年度の農産・畜産両部門の総取扱高は、農産物が天候不良の影響で前年度比5%減の126億4300万円となった。任期満了に伴う役員改選では、総会後の理事会で佐野政利専務理事を新組合長に選任した。任期は3年。

組合員数が500人を切ったため、今年度から規約などを変更して総代会制から総会制に移行した。

農産部門は18年6～7月の天候不良の影響で特に菜豆類と小豆が大きく減収となり、取扱高は前年度比14.7%減の46億7800万円。畜産部門は1.8%増の79億6500万円、生乳生産は4.1%増と堅調で個体販売価格も高水準で推移した。

今年度は5カ年計画の第9次農業振興計画と第3次J

A経営中期計画がスタートし、生産環境や健全な組織基盤構築などの体制整備と「食と農のサポーター」拡大に向けた取り組みを進める。老朽化したAコープ店舗を存続させるかの検討も進める。

総会には委任状などを含め361人が出席し、田中敏行組合長があいさつ。理事会では、佐野新組合長のほか専務理事に新津初男氏を選んだ。

農業生産・販売、過去最高の232億円 J A上土幌町

2019年6月8日

J A上土幌町（小椋茂敏組合長、正組合員196人）の第71回通常総会が7日、同J A事務所で開かれた。2018年度の農業生産高は前年度比1.1%増の232億3000万円と過去最高を更新した。

部門別では、酪農畜産が同2.9%増の196億6000万円。生乳生産は同5.3%増の11万2521トン。乳価の上昇もあり、生産高は111億8000万円と昨年を大きく上回った。一方、肉牛は取引単価の減少などで家畜取扱金額が同1.3%減の83億2800万円となった。

農産物は、天候不順の影響で同7.7%減の35億7000万円にとどまった。ジャガイモや大豆、小豆は例年並みの収量を確保できたものの、豆類では大正金時、野菜は根菜類が減収となった。当期末処分剰余金は3億125万円。

総会には約150人が出席。上音更地区の牛舎新設や、萩ヶ岡地区のバイオガスプラント貯留槽の建設地整備など今年度の事業計画を承認した。

小椋組合長は「自然災害や天候不順に悩まされた年だったが、過去最高の生産高となった。組合員の日々の努力に感謝したい」とあいさつした。総会後には理事会が開かれ、小椋組合長を再任した。